

♩ Joyful male chorus ♩  
『男声合唱を楽しむ会』

サロンコンサート プログラム

♪ 第1ステージ 男声合唱愛唱歌より

- 埴生の宿.....H.R.ビショップ作曲 里見 義 訳詞 増田 順平 訳詩
- かえろかえろ.....北原 白秋 作詞 山田 耕作 作曲 高須 道夫 編曲
- 婆やのお家.....林 柳波 作詞 本居 長世 作曲 林 雄一郎 編曲
- 秋の歌.....ポール・ウェラーヌ 作詞 南 弘明 作曲 堀口 大学 訳詩
- つる.....ガムサトフ 作曲 フレンケリ 作曲 中村 五郎 訳詞
- シェントア.....アメリカンシー シャンティ アリス パーカー/ロバート ショー 編曲
- リパブリック讃歌.....黒人霊歌 J.W.ハウ 作詞 W.ステフ 作曲 向川原 慎一 編曲

♪ 第2ステージ My song/Your song 『みんなで歌おう』  
=青春の懐かしい歌をもう一度=

- 若者たち.....藤田 敏雄 作詞 佐藤 勝 作曲
- 遠くへ行きたい.....中村 八大 作曲 福永 陽一郎 編曲
- 竹田の子守唄.....京都地方 民謡 寺島 尚彦 編曲
- ◇異邦人《オカシ演奏 神野 仁志》
- 見上げてごらん夜の星を.....永 六輔 作詞 いずみ たく 作曲
- 切手のない贈り物.....財津 和夫 作詞/作曲 伊藤 辰雄 編曲

♪ 第3ステージ 男声合唱のための唱歌メドレー

『ふるさとの四季』.....源田俊一郎 編曲

〔故郷 春の小川 朧月夜 鯉のほり 茶つみ 夏は来ぬ〕  
〔我は海の子 村祭 紅葉 冬景色 雪 故郷〕

♪ 第4ステージ 男声合唱組曲『雪明りの路』

.....伊藤 整 作詞 多田 武彦 作曲

♪ 全員合唱 『浜辺の歌』

オカリナ・神野 仁志

指揮・向川原 慎一

ピアノ・広江 さき

司会・伊藤 春雄

日時：2008年 9月 21日 (日)

開場 13:30 開演 14:00 終演 15:00

場所：名古屋市音楽プラザ 1F コーヒーラウンジ(サロン)

主催 男声合唱を楽しむ会

H.P <http://homepage2.nifty.com/chorus-dandan/>

## ご挨拶

本日は「男声合唱を楽しむ会」のサロンコンサートにご来場賜り誠にありがとうございます。私ども「男声合唱を楽しむ会」は、この6月で創立5周年を迎えました。

これまで、愛知万博で歌ったのを初ステージとし、以来、毎年、ここ名古屋市音楽プラザで「ファミリー合同練習会」、「サロンコンサート」を催し、ご来場頂いた多くの皆様と共に歌い楽しむことができました。

歌うことの喜び、歌うことの力を良き伴侶として健康で明るく楽しく過ごすことが私たちの願いであります。そして、この歌う喜びを、親から子へ、子から孫へ、広げて行きたいと思っています。

この一年の成果をお聞きいただき感想などお聞かせいただけましたら幸いに思います。

また、本日のこのコンサートは歌を愛好される皆様方と共に『楽しむコンサート』を目指しております。どうぞ、ご一緒に加わって頂き、私どもと共に楽しんでいただければ幸いに存じます。

最後にこれまで多くの方々に幾多のご支援を頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

会長 由比 健郎

## 《 今までの活動 》

2007年8月19日 サロンコンサート

- 2003年4月 第一回設立準備委員会開催
- 2003年6月 第一回練習開催
- 2004年8月 「音の交流会」開催：三菱重工 健保会館
- 2005年4月 指揮者「向川原 慎一」先生招聘
- 2005年9月 愛知万博「『あいち・おまつり広場』公演
- 2006年8月 「ファミリー合同練習会」開催：音楽プラザ
- 2007年8月 「サロンコンサート」開催：音楽プラザ
- 2008年9月 「サロンコンサート」開催：音楽プラザ



## 《 プロフィール 》

### ◆指揮 むかいがわら 向川原 慎一

早稲田大学第一政治経済学部卒業。長年にわたる合唱指揮・指導を行い、現在もいくつかの合唱団の指揮を務める。そのかわら、歌曲を中心とした作曲活動を続け、2007年の奏楽堂日本歌曲コンクール・第15回作曲部門(中田喜直賞の部)では2曲が本選に進み、優秀賞と入選を得た。

また、合唱編曲では2008年春、カワイ楽譜から「混声合唱のための5つのトスティ歌曲」と「ドボルジャークのジブシーの歌」が出版されている。小林研一郎氏に師事。

### ♥ピアノ 広江 さき

名古屋音楽大学音楽科 器楽学科 ピアノ専修卒業。ハンガリー国立リスト音楽院ピアノ専攻終了。シナフォークナショナル マスタークラス終了。グラーシュ・マルタ インターナショナルサマーセミナーに参加。日本ピアノ教育連盟オーディション奨励賞、日本クラシック音楽コンクール全国大会入選。

### ♠司会 伊藤 春雄

三菱重工業株式会社 名古屋航空宇宙システム製作所に入社。退社後、東海ラジオ『さん！さん！モーニング』を始め、岐阜放送、CBCラジオなど、数多くのパーソナリティを務める。最近は、演劇活動に力を入れており、今年5月には「今日は かあさん」公演に出演。

### 【【特別出演】】オカリナ演奏 じんのひとし 神野 仁志

ライリッシュ・オカリナ連盟所属講師。豊明市、東郷町、刈谷市、豊田市などでオカリナ教室を開き、グループレッスン形式の指導を主体として幅広く活動。昭和48年1月10日生まれ。

◎主なオカリナ指導講座⇒トヨタ生協カルスポ・オカリナ講座

豊田中日文化センター オカリナ講座

## 《 曲目と歌詞 》

### ●第1ステージ 男声合唱愛唱歌より

#### 「埴生の宿」

H.R.ビショップ 作曲 <sup>さとみ</sup>里見 <sup>ただし</sup>義 訳詞 増田 順平 編曲

埴生の宿も 我が宿	ふみよむ窓も わがまど
玉のよそおい うらやまじ	<sup>るり</sup> 瑠璃の床も <sup>ゆか</sup> うらやまじ
のどかなりや 春のそら	きよらなりや 秋の夜半
花はあるじ 鳥は友	はあるじ 虫は友
おお わが宿よ	おお わが窓よ
たのしとも たのもしや	たのしとも たのもしや



○1823年に作曲された歌劇「クラリ」のなかで歌われて、広く愛唱されるようになりました。作曲したビショップの説明によれば、原曲はシシリー地方<sup>(注)</sup>の古謡を補作したものだそうです。「埴生の宿」とは、土で作った粗末な家を意味する古語です。

(注)シシリー島:イタリア南端に浮かぶ地中海最大の島

#### 「かえろかえろと」

北原 白秋 作詞 山田 耕作 作曲 高須 道夫 編曲

かえろ、かえろと、なに<sup>ついで</sup>に見てかえる  
寺の 築地の 影をみいみい かえる  
「かえろがなくから かえろ」



かえろ かえろと だれだれ かえる  
お手手 ひきひき ぽつりぽつり かえる  
「かえろがなくから かえろ」



かえろ かえろと なに<sup>し</sup>に為て かえる  
畑の 玉ねぎ たたきたたき かえる  
「かえろがなくから かえろ」

かえろ かえろと どこまでかえる  
あかい<sup>ひ</sup> 燈のつく 三丁さきまで かえる  
「かえろがなくから かえろ」

○近代日本の文学・文芸に大きな足跡を残した歌人でもあり、文学者でもある《北原白秋》の詩に、日本語の抑揚を活かしたメロディで数多くの作品を残した《山田耕作》曲による童謡です。幼い頃から歌い親しんだ『砂山』、『ペチカ』、『待ちぼうけ』、『あわて床屋』なども二人の作詞、作曲による作品です。

「婆やのお家」

林 柳波 作詞 本居 長世 作曲 林 雄一郎 編曲

あの道を 右にまがって  
茶畑の すみのところよ  
お屋根には鳩がいない  
村の子に教えられたよ



ねえ 婆や 久しぶりだね  
あゝ そうだ 思い出したよ  
むく犬は いまもいるかね  
牛小屋に斑牛もいるかね



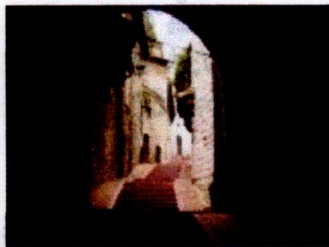
あの道を忘れかけたが  
ねえ 婆や 藁のお屋根と  
思い出の 北のお窓に  
来てみれば みんな知ってる  
ねえ 婆や みんな知ってる

○童謡詩人として知られる《林 柳波》の詩。他に『たなばたさま』、『ひなまつり』、『おうま』などがあります。『婆やのお家』もそのうちのひとつで《本居 長世》によるこの曲は男声合唱曲の代表作品です。庭に佇んでいる婆やの姿が見えるようです。

「秋の歌」

ポール・ヴェルレーヌ 作詞 南 弘明 作曲 堀口 大学 訳詩

秋風のヴァイオリン<sup>(注)</sup>の節長きすすりなき  
物憂き悲しみに我が魂をいたましむ



ときの鐘 鳴りも出ずれば  
せつなくも胸せまり 思いぞ出ずる  
来しかたに涙は湧く

落ち葉ならね 身をば遣る  
私も かなたこなた吹きまくれ 逆風よ  
吹きまくれ 逆風よ

(注)ヴァイオリン:ヴァイオリン

○男声合唱組曲『月下の一群』の中の一節。原詩は《ポール・ヴェルレーヌ》の有名な詩です。《堀口大学》による実に美しい日本語訳は原語がフランス語とは思えない名訳です。これに、《南 弘明》の青年らしい感受性、想像力に富んだ作風によってこの曲の重厚さを感じさせるに余りありません。

## 「つる」

ガムザトフ 作詩 フレンケリ 作曲

中村 五郎 訳詞 中山 英雄 編曲

空を飛ぶ鶴の 群れの中にあなたは 戦に命すてても 死んではないあなたは  
きつという きつと きつという きつと生きてる  
この私を待っている この私を待っている  
激しい戦いの日も 空に群れて飛ぶ 激しい戦いの日も 空に群れて飛ぶ  
美しい鶴の群れ 美しい鶴の群れ  
あなたはそこにいる あなたはそこにいる

○夕空を飛ぶ白い鶴の群れに帰らぬ兵士を思う悲壮感漂う曲です。戦場で散った戦友は鶴に姿を変えて群れをなして大空を飛んでいるのだと偲んで歌います。1965年に来日したダゲスタンのアヴァール人民族詩人の《ガムザトフ》が広島原爆資料館を訪れ、その強い衝撃と千羽鶴をモチーフに作詞しました。

## 「シェナンドア」(Shenandoah)

アメリカ シー・シャンティ

アリス パーカー／ロバート ショー 編曲

Oh, Shenandoah, I long to hear you,  
Way-hay, you rolling river,  
A-way we're bound to go,  
'Cross the wide Missouri.

Oh, Shenandoah, I love your daughter,  
Way-hay, you rolling river,

Oh, Shenandoah, I love your daughter,  
A-way we're bound to go,  
'Cross the wide Missouri.

'Tis sev' n long years since last I see thee,  
Sev' n long years, sev' n years,  
Way-hay, you rolling river,  
Shenandoah, A-way we're bound to go,  
'Cross the wide Missouri.  
The wide Missouri.



Oh, Shenandoah, I'm bound to leave you,  
Way-hay, you rolling river,  
Oh, Shenandoah, I'll not deceive you,  
A-way we're bound to go,

'Cross the wide Missouri.  
Oh, Shenandoah, I long to hear you,  
Way-hay, you rolling river,  
A-way we're bound to go,  
'Cross the wide Missouri.

○アメリカには、シー・シャンティといわれる海の歌があります。これもそのひとつですが、そのなかでもキャプスタン・シャンティといわれるもっとも美しい歌です。もとはカナダの毛皮貿易商に雇われた船乗りの恋歌から出たものと言われています。シェナンドアというのは、インディアンの酋長の名で、船上での作業の際に歌われたものでしょう。

《概訳》 おお、シェナンドア、あなたに会いたいのだ、返事が聞きたい。流れる川よ、広いミズリー川を渡って行こう、私はあなたの娘さんを愛している。流れる川よ、彼女を求めて私は流れを渡る…。

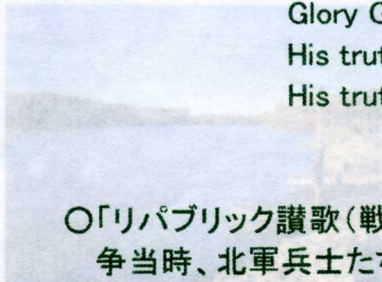
# 「リパブリック讃歌」(Battle Hymn of the Republic)

曲 黒人霊歌 W. ステッフ 作曲 J.W.ハウ作詞 向川原 慎一 編曲

Glory Glory Hallelujah!  
Glory Glory Hallelujah! ゲロ ゲロ ゲロ ゲロ…  
Glory Glory Hallelujah! おたまじゃくしはかえるのこ  
His truth is marching on! なまずの孫ではないわいな  
それが何より証拠には  
やがて手が出る 足が出る  
ニョキ ニョキ ニキ …

オタマジャクシハ カエルノコ  
なまずの孫ではないわいな  
それが何より証拠には  
やがて手が出る 足が出る  
やがて手が出る 足が出る

Glory Glory Hallelujah! おたまじゃくしは何?  
Glory Glory Hallelujah! おたまじゃくしは何?  
Glory Glory Hallelujah! みんなで歌おう  
His truth is marching on! おたまじゃくしはお友達!!  
His truth is marching on! ヤー!!

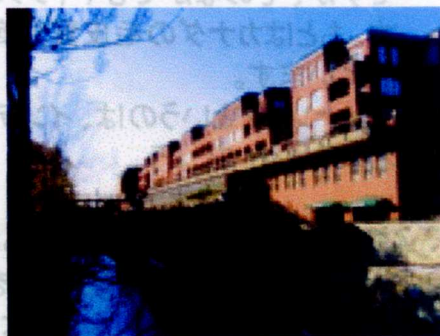


○「リパブリック讃歌(戦いの祈り)」は1862年に出版された古い歌で、南北戦争当時、北軍兵士たちの愛唱歌でした。作詩は《J.W.ハウ夫人》で1861年のある夜、ワシントン市内を行進する北軍兵士の隊列を見て書き上げたと言います。後に南軍の捕虜となった従軍牧師《C. マッケープ》が「グローリー・ハレルヤ」と言う讃美歌の旋律に合わせて歌ったところ、捕虜たちの間で愛唱され北軍全体に広まりました。

《概訳》 栄光あれ！ ハレルヤ！  
主の真理は行進を続ける。

この曲は日本でもいろいろな歌詞で親しまれています。本日は「おたまじゃくしは蛙の子」<sup>(注)</sup>でお楽しみ下さい。

(注)原曲作詞:永田哲夫、東 辰三



●第2ステージ My Song/Your Song「みんなで歌おう」

「若者たち」

藤田 敏雄 作詞 佐藤 勝 作曲

君の行く道は 果てしなく遠い  
だのになぜ 歯を食いしばり  
君は行くのか そんなにしてまで

君のあの人は 今はもういない  
だのになぜ 何を探して  
君は行くのか あてもないのに

君の行く道は 希望へと続く  
空にまた 日が昇るとき  
若者はまた 歩きはじめる



「遠くへ行きたい」 永 六輔 作詞 中村 八大 作曲 福永 陽一郎 編曲

知らない街を 歩いてみたい どこか遠くへ行きたい  
知らない海を眺めてみたい どこか遠くへ行きたい

遠い街 遠い海 夢はるか 一人旅 愛し合い 信じあい いつの日か幸せを  
愛する人とめぐり逢いたい 愛する人とめぐり逢いたい  
どこか遠くへ行きたい どこか遠くへ行きたい

「竹田の子守唄」

京都地方 民謡 寺島 尚彦 編曲

守もいやがる 盆から先にや  
雪もちらつくし 子も泣くし

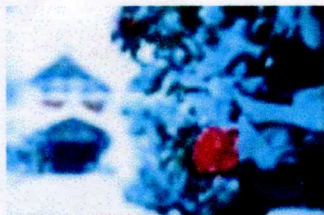
◆オカリナ演奏 神野 仁志

盆が来たとして 何うれしかろ  
かたびら<sup>(注1)</sup>はなし おびはなし

この子よう泣く 守をばいじる<sup>(注2)</sup>  
守も一日 やせるやら

はよも行きたや この在所こえて  
向うに見えるは 親のうち

向うに見えるは 親のうち



(注1)かたびら:裏地のない「ひとえの着物」

(注2)守をばいじる:子守に苦勞する

『異邦人』 = オカリナ演奏 = 神野 仁志

「見上げてごらん夜の星を」

永 六輔 作詞 いずみ たく 作曲

見上げてごらん 夜の星を  
小さな星の 小さな光が  
ささやかな幸せを うたってる

見上げてごらん 夜の星を  
ボクらのように 名もない星が  
ささやかな幸せを祈ってる

手をつなごう ボクと  
おいかけよう夢を  
二人なら  
苦しくなんかないさ

見上げてごらん 夜の星を  
小さな星の 小さな光が  
ささやかな幸せをうたってる  
見上げてごらん夜の星を  
ボクらのように名もない星が  
ささやかな幸せを祈ってる

「切手のないおくりもの」

財津 和夫 作詩/作曲 伊藤 辰雄 編曲

わたしから あなたへ この歌を届けよう  
広い世界に たった一人の わたしの好きなあなたへ

年老いた あなたへ この歌を届けよう  
心やさしく育ててくれた お礼がわりにこの歌を

夢のない あなたへ この歌を届けよう  
愛することの喜びを知る 魔法仕掛けのこの歌を

知り合えた あなたに この歌を届けよう  
今後よろしく願います 名刺がわりに この歌を

別れゆく あなたに この歌を届けよう  
寂しいときに歌ってほしい 遠い空からこの歌を





●第3ステージ

男声合唱のための唱歌メドレー 『ふるさとの四季』 源田俊一郎 編曲

「故郷」尋常小学唱歌第六学年用(大正3年)高野辰之 作詞 岡野貞一 作曲

うさぎ 兔 <sup>うさぎ</sup> 追 <sup>お</sup> い <sup>い</sup> しかの山	い <sup>い</sup> か 如何 <sup>い</sup> に <sup>か</sup> い <sup>い</sup> ます <sup>ま</sup> 父 <sup>ちち</sup> 母 <sup>はは</sup>	こ <sup>こ</sup> ろ <sup>ろ</sup> ざ <sup>ざ</sup> し <sup>し</sup> を <sup>を</sup> は <sup>は</sup> た <sup>た</sup> して
こぶな 小 <sup>こ</sup> 鮒 <sup>ぶ</sup> 釣 <sup>つ</sup> り <sup>り</sup> しかの川	つ <sup>つ</sup> が 恙 <sup>つ</sup> なし <sup>な</sup> や <sup>や</sup> 友 <sup>とも</sup> が <sup>が</sup> き	い <sup>い</sup> つ <sup>つ</sup> の <sup>の</sup> 日 <sup>ひ</sup> に <sup>に</sup> か <sup>か</sup> 帰 <sup>かえ</sup> らん
夢 <sup>ゆめ</sup> は <sup>は</sup> 今 <sup>いま</sup> も <sup>も</sup> め <sup>め</sup> ぐ <sup>ぐ</sup> り <sup>り</sup> て	雨 <sup>あめ</sup> に <sup>に</sup> 風 <sup>かぜ</sup> に <sup>に</sup> つ <sup>つ</sup> け <sup>け</sup> て <sup>て</sup> も	山 <sup>やま</sup> は <sup>は</sup> あ <sup>あ</sup> お <sup>お</sup> き <sup>き</sup> 故 <sup>ふる</sup> 郷 <sup>さと</sup>
忘 <sup>わす</sup> れ <sup>れ</sup> が <sup>が</sup> た <sup>た</sup> き <sup>き</sup> 故 <sup>ふる</sup> 郷 <sup>さと</sup>	思 <sup>おも</sup> い <sup>い</sup> い <sup>い</sup> ず <sup>ず</sup> る <sup>る</sup> 故 <sup>ふる</sup> 郷 <sup>さと</sup>	水 <sup>みづ</sup> は <sup>は</sup> 清 <sup>きよ</sup> き <sup>き</sup> 故 <sup>ふる</sup> 郷 <sup>さと</sup>

「春の小川」 国定教科書 三年生の音楽(昭和22年) 高野辰之 作詞  
(林 柳波 改作) 岡野貞一 作曲



春 <sup>はる</sup> の <sup>の</sup> 小 <sup>こ</sup> 川 <sup>がわ</sup> は <sup>は</sup> さ <sup>さ</sup> ら <sup>ら</sup> さ <sup>さ</sup> ら <sup>ら</sup> 行 <sup>い</sup> く <sup>く</sup> よ	春 <sup>はる</sup> の <sup>の</sup> 小 <sup>こ</sup> 川 <sup>がわ</sup> は <sup>は</sup> さ <sup>さ</sup> ら <sup>ら</sup> さ <sup>さ</sup> ら <sup>ら</sup> 行 <sup>い</sup> く <sup>く</sup> よ
岸 <sup>かた</sup> の <sup>の</sup> す <sup>す</sup> み <sup>み</sup> れ <sup>れ</sup> や <sup>や</sup> れ <sup>れ</sup> ん <sup>ん</sup> げ <sup>げ</sup> の <sup>の</sup> 花 <sup>はな</sup> に <sup>に</sup>	え <sup>え</sup> び 蝦 <sup>え</sup> や <sup>や</sup> め <sup>め</sup> だ <sup>だ</sup> か <sup>か</sup> や <sup>や</sup> こ <sup>こ</sup> ぶ <sup>ぶ</sup> な <sup>な</sup> む <sup>む</sup> れ <sup>れ</sup> 小 <sup>こ</sup> 鮒 <sup>ぶ</sup> の <sup>の</sup> 群 <sup>ぐん</sup> に <sup>に</sup>
す <sup>す</sup> が <sup>が</sup> た <sup>た</sup> や <sup>や</sup> さ <sup>さ</sup> し <sup>し</sup> く <sup>く</sup> 色 <sup>いろ</sup> う <sup>う</sup> つ <sup>つ</sup> く <sup>く</sup> し <sup>し</sup> く	今 <sup>いま</sup> 日 <sup>ひ</sup> も <sup>も</sup> 一 <sup>いっ</sup> 日 <sup>にち</sup> ひ <sup>ひ</sup> な <sup>な</sup> た <sup>た</sup> で <sup>で</sup> お <sup>お</sup> よ <sup>よ</sup> ぎ
咲 <sup>さ</sup> け <sup>け</sup> よ <sup>よ</sup> 咲 <sup>さ</sup> け <sup>け</sup> よ <sup>よ</sup> と <sup>と</sup> さ <sup>さ</sup> さ <sup>さ</sup> や <sup>や</sup> き <sup>き</sup> な <sup>な</sup> が <sup>が</sup> ら	遊 <sup>あそ</sup> べ <sup>べ</sup> 遊 <sup>あそ</sup> べ <sup>べ</sup> と <sup>と</sup> さ <sup>さ</sup> さ <sup>さ</sup> や <sup>や</sup> き <sup>き</sup> な <sup>な</sup> が <sup>が</sup> ら

「朧月夜」 尋常小学唱歌第六学年用(大正3年)  
高野辰之 作詞 岡野貞一 作曲

な はなばたけ いりひ 菜 <sup>な</sup> の <sup>の</sup> 花 <sup>はな</sup> 畠 <sup>はなばたけ</sup> に <sup>に</sup> 入 <sup>い</sup> り <sup>り</sup> 日 <sup>ひ</sup> 薄 <sup>うす</sup> れ	ほ <sup>ほ</sup> か <sup>か</sup> げ 里 <sup>さと</sup> わ <sup>わ</sup> の <sup>の</sup> 火 <sup>ひ</sup> 影 <sup>かげ</sup> も <sup>も</sup> 森 <sup>もり</sup> の <sup>の</sup> 色 <sup>いろ</sup> も
見 <sup>み</sup> わ <sup>わ</sup> た <sup>た</sup> す <sup>す</sup> 山 <sup>やま</sup> の <sup>の</sup> 端 <sup>はた</sup> 霞 <sup>は</sup> ふ <sup>ふ</sup> か <sup>か</sup> し	田 <sup>で</sup> 中 <sup>なか</sup> の <sup>の</sup> 小 <sup>こ</sup> 路 <sup>みち</sup> を <sup>を</sup> た <sup>た</sup> ど <sup>ど</sup> る <sup>る</sup> 人 <sup>ひと</sup> も
春 <sup>はる</sup> 風 <sup>かぜ</sup> そ <sup>そ</sup> よ <sup>よ</sup> ふ <sup>ふ</sup> く <sup>く</sup> 空 <sup>そら</sup> を <sup>を</sup> 見 <sup>み</sup> れ <sup>れ</sup> ば	か <sup>か</sup> わ <sup>わ</sup> ず 蛙 <sup>か</sup> の <sup>の</sup> な <sup>な</sup> く <sup>く</sup> ね <sup>ね</sup> も <sup>も</sup> か <sup>か</sup> ね <sup>ね</sup> の <sup>の</sup> 音 <sup>ね</sup> も
夕 <sup>ゆふ</sup> 月 <sup>げつ</sup> か <sup>か</sup> か <sup>か</sup> り <sup>り</sup> て <sup>て</sup> にお <sup>お</sup> い <sup>い</sup> 淡 <sup>たん</sup> し	さ <sup>さ</sup> な <sup>な</sup> が <sup>が</sup> ら <sup>ら</sup> 霞 <sup>かすみ</sup> め <sup>め</sup> る <sup>る</sup> 朧 <sup>おぼろ</sup> 月 <sup>げつ</sup> 夜 <sup>や</sup>

「鯉のぼり」 尋常小学唱歌第五学年用(大正2年) 文部省唱歌

いらか 葦 <sup>い</sup> の <sup>の</sup> 波 <sup>なみ</sup> と <sup>と</sup> 雲 <sup>くも</sup> の <sup>の</sup> 波 <sup>なみ</sup>	開 <sup>ひら</sup> け <sup>け</sup> る <sup>る</sup> 広 <sup>ひろ</sup> き <sup>き</sup> 其 <sup>その</sup> の <sup>の</sup> 口 <sup>くち</sup> に <sup>に</sup>
重 <sup>かさ</sup> なる <sup>る</sup> 波 <sup>なみ</sup> の <sup>の</sup> 中 <sup>なか</sup> 空 <sup>ぞら</sup> を <sup>を</sup>	舟 <sup>ふね</sup> を <sup>を</sup> も <sup>も</sup> 吞 <sup>の</sup> まん <sup>ま</sup> ん <sup>ん</sup> 様 <sup>さま</sup> 見 <sup>み</sup> え <sup>え</sup> て
たちばな 橘 <sup>たち</sup> か <sup>か</sup> お <sup>お</sup> る <sup>る</sup> 朝 <sup>あ</sup> 風 <sup>かぜ</sup> に <sup>に</sup>	ゆ <sup>ゆ</sup> た <sup>た</sup> か <sup>か</sup> に <sup>に</sup> 振 <sup>ふる</sup> う <sup>う</sup> 尾 <sup>お</sup> 尾 <sup>お</sup> に <sup>に</sup> は
高 <sup>たか</sup> く <sup>く</sup> 泳 <sup>およ</sup> ぐ <sup>ぐ</sup> や <sup>や</sup> 鯉 <sup>こい</sup> の <sup>の</sup> ぼ <sup>ぼ</sup> り	物 <sup>もの</sup> に <sup>に</sup> 動 <sup>どう</sup> ぜ <sup>ぜ</sup> ぬ <sup>ぬ</sup> 姿 <sup>すがた</sup> あ <sup>あ</sup> り



「茶摘」 尋常小学唱歌第三学年用(明治45年) 文部省唱歌

夏 <sup>なつ</sup> も <sup>も</sup> 近 <sup>ちか</sup> づく <sup>く</sup> 八 <sup>はち</sup> 十 <sup>じゅう</sup> 八 <sup>はち</sup> 夜 <sup>や</sup>	ひ <sup>ひ</sup> よ <sup>よ</sup> り 日 <sup>ひ</sup> 和 <sup>わ</sup> つ <sup>つ</sup> づ <sup>づ</sup> き <sup>き</sup> の <sup>の</sup> 今 <sup>いま</sup> 日 <sup>ひ</sup> 此 <sup>この</sup> 頃 <sup>ころ</sup> を <sup>を</sup>
野 <sup>の</sup> に <sup>に</sup> も <sup>も</sup> 山 <sup>やま</sup> に <sup>に</sup> も <sup>も</sup> 若 <sup>わか</sup> 葉 <sup>は</sup> が <sup>が</sup> 茂 <sup>さ</sup> る <sup>る</sup>	心 <sup>こころ</sup> の <sup>の</sup> ど <sup>ど</sup> か <sup>か</sup> に <sup>に</sup> 摘 <sup>つ</sup> み <sup>み</sup> つ <sup>つ</sup> つ <sup>つ</sup> 歌 <sup>うた</sup> う
「あ <sup>あ</sup> れ <sup>れ</sup> に <sup>に</sup> 見 <sup>み</sup> え <sup>え</sup> る <sup>る</sup> は <sup>は</sup> 茶 <sup>ちや</sup> 摘 <sup>つ</sup> じ <sup>じ</sup> ゃ <sup>ゃ</sup> な <sup>な</sup> い <sup>い</sup> か <sup>か</sup> 」	「摘 <sup>つ</sup> め <sup>め</sup> よ <sup>よ</sup> 摘 <sup>つ</sup> め <sup>め</sup> 摘 <sup>つ</sup> め <sup>め</sup> 摘 <sup>つ</sup> ま <sup>ま</sup> ね <sup>ね</sup> ば <sup>ば</sup> な <sup>な</sup> ら <sup>ら</sup> ぬ
あ <sup>あ</sup> か <sup>か</sup> ね <sup>ね</sup> だ <sup>だ</sup> す <sup>す</sup> き <sup>き</sup> に <sup>に</sup> 管 <sup>すげ</sup> の <sup>の</sup> 笠 <sup>かさ</sup> 」	摘 <sup>つ</sup> ま <sup>ま</sup> に <sup>に</sup> や <sup>や</sup> 日 <sup>にっ</sup> 本 <sup>ぽん</sup> の <sup>の</sup> 茶 <sup>ちや</sup> に <sup>に</sup> な <sup>な</sup> ら <sup>ら</sup> ぬ」

「夏は来ぬ」新編教育唱歌集第5学年用(明治29年)

佐々木 信綱 作詞 小山 作之助 作曲

うの花のにおう垣根に

さみだれのそそぐ山田に

ほととぎす  
時鳥 早もきなきて

さおとめ もすそ  
早乙女が裳裾ぬらして

しのびね  
忍音もらす 夏は来ぬ

たまなえ  
玉苗ううる 夏は来ぬ

「われは海の子」尋常小学読本唱歌(明治43年) 文部省唱歌

われ しらなみ  
我は海の子白浪の

ゆあみ  
生まれてしおに浴して

さわぐいそべの松原に

浪を子守の歌と聞き

煙たなびくとまよこそ

千里寄せくる海の気を

わ すみか  
我がなつかしき住家なれ

吸いてわらべとなりけり



「村祭」尋常小学唱歌第三学年用明治45年) 文部省唱歌

ちんじゆ  
村の鎮守の神様の

年も豊年満作で

おまつりび  
今日はめでたい御祭日

そうで おまつり  
村は総出の大祭

どんどんひやらら

どんどんひやらら

どんひやらら

どんひやらら

どんどんひやらら

どんどんひやらら

どんひやらら

どんひやらら

き  
朝から聞こえる笛太鼓

にぎわ  
夜まで賑う宮の森

「紅葉」尋常小学唱歌第二学年用明治44年)

高野 辰之 作詞 岡野 貞一 作曲



秋の夕日に照る山紅葉

たに ながれ  
溪の流に散り浮く紅葉

濃いも薄いも数ある中に

波にゆられて離れてよって

かえで つた  
松をいろどる楓や蔦は

さまざま  
赤や黄色の色様々に

すそもよう  
山のふもとの裾模様

にしき  
水の上にも織る錦

「冬景色」尋常小学唱歌第五学年用(大正2年) 文部省唱歌

みなとえ  
さ霧消ゆる湊江の舟に白し朝の霜

ただ水鳥の声はして 今だ覚めず岸の家

からすな

烏啼きて木に高く 人は畑に麦を踏む

はた

げに小春日ののどけしや かえり咲きの花も見ゆ

「雪」 尋常小学唱歌第二学年用(明治44年) 文部省唱歌

いっさず II

雪やこんこ <sup>あられ</sup>霰やこんこ  
降っては降っては <sup>つも</sup>ずんずん積る  
山も野原も <sup>わたぼうし</sup>綿帽子かぶり  
枯木残らず花が咲く

雪やこんこ <sup>あられ</sup>霰やこんこ  
降っても降ってもまだ降りやまぬ  
犬は喜び <sup>かけ</sup>庭駆けまわり  
猫は <sup>こたつ</sup>火燵で丸くなる



「故郷」 尋常小学唱歌第六学年用(大正3年)

高野辰之 作詞 岡野貞一 作曲

<sup>うさぎ</sup>兔 追いしかの山  
<sup>こぶな</sup>小鮒釣りしかの川  
夢は今もめぐりて  
忘れがたき故郷

<sup>い</sup>如何にいます父母  
<sup>つつが</sup>恙なしや友がき  
雨に風につけても  
思いいずる故郷

ころざしをはたして  
いつの日にか帰らん  
山はあおき故郷  
水は清き故郷



●第4ステージ

男声合唱組曲「雪明りの路」

多田 武彦 作曲 伊藤 整 作詞

I 春を待つ

ふんはりと雪の積もった山かげから  
冬空がきれいに晴れ渡ってゐる。

うっすら寒く  
日が暖かい。  
日向ぼっこするまつ毛の先に  
ぽっと春の日の夢が咲く。

しみじみと日の暖かさは身にしむけれど  
ま白い雪の山越えて  
春の来るのはまだ遠い。



○北海道、小樽。北国の冬は厳しい。雪の多い暗かった冬のある日、久しぶりに晴れ渡った陽の光のもとで、春へのあこがれを語る。

## II 梅ちゃん

櫻井 春 文 ( 平 林 谷 即 用 平 学 二 葉 櫻 即 学 小 常 學 〔 雪 〕

梅ちゃんの家は焼けた。

僕と遊んだ頃の

ばあさんは死に

爺さんひとり居るわらや藁家で

春の雪どけの晩

爺さんが酒をのんで火をだした。

あの藁家が崩れた。

春になって 草がまっ蒼にのびた頃にも

焼あとには黒い掘立杭ほったてぐいが立ってゐた。

僕が十八の春、

梅ちゃんは小樽のげいしゃ。

あの藁家は燃えちまったよ。

○幼な友達の梅ちゃんの家が丸焼けになった。春になって草がまっ蒼に伸びた頃になって焼け残っている黒い掘立杭ほったてぐいを見るとまた悲しい。梅ちゃんは今、どうして…。

## III 月夜を歩く

泣きやんだあとの様に

月が白い輪をもった夜更けて

私は

ひとりおしよろ忍路の街を通りぬける。

きりどう  
切通しをのぼりきれば

海が見える さびれた家並がある。

海は湾の内に死んで

灰色の背を見せ、

家々は寝しづまってゐる。

そとに夜どほし立ってゐる桐の木の花が  
甘く 鋭く匂ってゐる。

私は いくつも いくつも

塩風で白くなった板戸の前をすぎて

わるいことをするやうに

下駄の音をしのばせてそこを通りぬけた。

あゝ 何のための

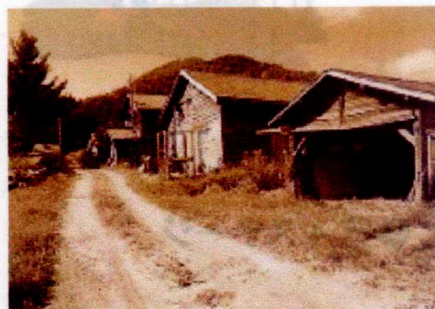
遠い夜道だったらう。

いたどりの多い忍路から出る坂路で

誰も知るまいと

私は白い月を顔にあびて微笑んでみたのだ。

○その夜、忍路おしよろの町へ行ったのは何の用事だったのか。大きな暈かさの輪の月夜の道で「月を顔にあびて微笑んでみた」のはなぜだったのか。何かの喜びごとがあったのか。桐の花のあまい匂い。虎杖の多い坂。北国の情景とともに歌う。



#### IV 白い障子

風がひと吹きすぎさると  
ざあっと

すすで赤くなった<sup>へや</sup>室には  
障子が立てられ

豆を撒いたやうに雨が屋根をたたく。 みんなは暖い夕食の箸をとる。

秋が来たので  
白い障子の立てられた中で。

○北国の夏は華やかに、あっと言う間に終わる。秋が来て、白い障子がたてまわされたうちに家族の暖かい<sup>だんらん</sup>団欒がある。冷たい秋の雨のなか、これから訪れるであろう長い冬を予感しつつ…。

#### V 夜まはり

夜まはり 夜まはり  
毎晩月夜に歩きまはるので

人はふかく寝込み  
夜はたいへん更けて

爺さんの目は赤くただれてしまった。  
からん からん

悩ましい夢が<sup>ちまた</sup>巷にただよってある。  
からん からん

家の角は白くけぶって  
人の知らない月影がある。

黒い装束<sup>しやうぞく</sup>に顔の大きな爺さんの目は赤くただれてをった。

○目が赤くただれた、黒装束<sup>くろしやうぞく</sup>の大顔<sup>おおがお</sup>の夜番の不気味な声が遠くに近くに聞こえる。潮風にさらされて白っぽくなった漁場の板戸を振るわせる。

#### VI 雪夜

あゝ 雪のあらしだ。  
家々はその中に盲目になり 身を伏せて  
埋もれてゐる。

この恐ろしい夜でも  
そっと窓の雪を叩いて外を覗いてごらん。

あの吹雪が

木々に唸って 狂って

ひと  
一しきり去った後を

あんがい  
案外に明るくて

気づかれないように覗いてごらん

もう道なんか無くなってゐるが

雪明かりだよ。

しづかな青い雪明りだよ。

○雪嵐の猛り狂う夜の恐れ。冬の自然は恐怖そのものである。だが、嵐が去った後の、雪の夜の何と穏やかなことか。肌を突き刺す寒さがうっすらと青い雪明りの透明な美しさをより一層美しくさせる。静寂で白い雪明りである。

◎この組曲は昭和34年(1959年)8月に作曲、翌年1月 関西学院グリークラブにより初演された。北原白秋の「柳川風俗詩」と同様、この『雪明りの路』は、北海道小樽近郊に郷里を持つ伊藤整がそこに詩の背景を求めて書き、「雪明りを良く知り、永久に其処を辿るあの人々」に捧げた詩集である。

自分の詩の背景について、伊藤整は『雪明りの路』の序文で次のように言っている。

この詩集の大部分を色づけているのは北海道の自然である。北海道の雪と緑とである。私の故郷は小樽市の西二里、高島と忍路<sup>おしよろ</sup>との間の塩谷村である。

その辺一帯は、北海道とはいうものの、石狩の平野とか北見手塩<sup>てしお</sup>の方の自然林とは大分異なっている。木は落葉松が多く、栗、白樺などもある。海岸にそうて、これらの木の繁った丘陵が続いている。落葉松の葉は秋になれば皆黒く落ちてしまう。草では虎杖<sup>いたどり</sup>が目立って多く一丈近くになる。私たちは虎杖<sup>いたどり</sup>をどんぐいと言った。

冬は十一月から四月まで雪が四五尺も積もりその間私たちはスキーをやる。

全く半年は雪なのだ。春は鯨<sup>にしん</sup>の魚場の仕事がすめば、梅も桜も皆一時に咲きほこる。九月には海にも入れないように涼しくなってしまう。そして林檎<sup>りんご</sup>が赤く実る。

私の詩をよく解ってもらえるのは北国の人々だ。硝子に出来る朝の結晶や、吹雪に暮れる家並や、道もない夜明けや、閑古鳥の声や、落葉松の美しい浅緑などと仲の良い人たちは私の詩の背景を理解してくれるであろう。

解説出典：詩集「雪明りの路」株式会社 日本図書センター 2006年1月25日初版 第1刷  
日本の詩歌 27 現代詩集 中央公論社 昭和45年3月15日 初版発行  
日本合唱曲選・5 多田武彦作品集(男声編)

◎伊藤 整(いとう せい) 1905年1月16日-1969年11月15日

評論家、詩人、小説家、本名は整(ひとし)。日本芸術院会員、日本芸術院賞。北海道松前郡に生まれ、1906年に塩谷村(現在の小樽市塩谷町)へ移住。旧制小樽中学(現北海道小樽潮陵高等学校)を経て小樽高等商業学校(現小樽商科大学)卒業後、教師を経て上京、東京商科大学(現市橋大学)入学・中退。

20世紀日本文学の重要な文芸評論家の一人。昭和初期にジェームズ・ジョイスらの影響を受けて「新心理主義」を提言。『ユリシーズ』を翻訳する。北海道時代には詩作を中心にを行い処女詩集『雪明りの路』で注目される。(出典:Wikipedia)

## ●全員合唱 「浜辺の歌」 [楽譜/歌詞:裏表紙を参照下さい]

### ●●● 会員募集中 いっしょに歌いませんか? ●●●

- ・練習日 : 月2回 (第2土曜日及びその後2週後の日曜日)
- ・練習場所 : 名古屋市音楽プラザ(金山) 他 名古屋市内文化小劇場
- ・会費 : 1,000円/月(学生 無料) (入会金 1,000円)
- ・問合せ先 : 岩崎幸男(090-6593-4831) 片山正之(052-773-3901)  
古田和則(090-2478-9708) 大嶋順二(090-1292-4378)  
小平康義(0566-99-1015) 三宅宏幸(090-4798-5127)
- ・会の理念 : 歌をこよなく愛し、何時までも若々しく、お互いがお互いを理解し合い、歌を通じて健康で明るく豊かな人生を送る。(人が皆のために、皆が人のために)
- ・会の目標 : より深く、熱い情熱を持って自分たちの音楽を模索し続け、他に類のない合唱団を目指す。

## 《 役員 》

《 即合員全 》

- 会長 : 由比 健郎    ■ 副会長 : 岩崎 幸男    ■ 総務 : 岩崎 幸男
- 会計 : 岩田 照雄    ■ 渉 外 : 三宅 宏幸    藤野 倫男
- パートマネージャ :
- (T1) 三宅 宏幸    小平 康義    (T2) 堀尾 貞臣    大河内 康二  
(B1) 片山 正之    佐藤 晃    (B2) 大嶋 順治    田中 昭
- 広報 : 井田 三郎    ■ 楽 譜 : 木村 幹夫
- 技術 : 小平 康義    礪田 桂司

## 《 出演者名簿 》

- T1: 礪田 桂司    井田 三郎    岩田 照雄    向後 宣彦  
小平 康義    高橋 修    橋本 光正    三宅 宏幸    (8名)
- T2: 大河内康二    桂川 昇    高瀬 幸夫    田口 参之  
林 光明    堀尾 貞臣    門間 清秀    横井 邦明    (8名)
- B1: 岩崎 幸男    大内 住夫    片山 正之    佐藤 晃  
塚原 徹也    藤野 倫男    (6名)
- B2: 遠藤 恭之    大嶋 順治    木村 幹夫    田中 昭  
古田 和則    松本 義明    丸山 青朗    由比 健郎    (8名)

### ●●● 交歓会(打上げ)のご案内 ●●●

- ・日 時 : 9月21日(日) 15:30~17:00  
・場 所 : かに道楽 (金山店)  
金山交差点 北東角 北陸銀行 前  
・TEL : 052-321-7890  
・会 費 : 3,800円  
・お申込 : 会場受付 または  
岩 崎 (090-6593-4831)まで

...OB、OG、お友達の方、お気軽に参加下さい...

《 全員合唱 》

《 員 分 》

民幸 編曲：藤野 隆 民幸 編曲：長谷川 隆 藤野 由由：長谷川 隆

民幸 編曲：藤野 隆 藤野 由由：長谷川 隆

# 浜 辺 の 歌

作詞 林 古 溪  
作曲 成 田 為 三  
編曲 和 泉 一



1. あ し た-は ま- ベ- を さ- ま- よ え-  
2. ゆ う ベ-は ま- ベ- を も- と- お れ-



ば - む か し- の こ- と - ぞ し-  
ば - む か し- の ひ- と - ぞ し-



の - ば る る - か ぜ の お - と 風 よ く  
の - ば る る - よ す る な - み 出 よ か



も の さ ま よ - よ す る - な --  
え す な み よ - つ き の - い --



み - も か - い の い ろ も -  
ろ - も ほ - し の か げ も -

「浜辺の歌」 林 古 溪 作詞 成 田 為 三 作曲 和 泉 一 編曲

あした浜辺を	さまよえば	ゆうべ浜辺をも	とおれば
昔のことぞ	忍ばるる	昔の人ぞ	忍ばるる
風よ音よ	雲のさまよ	寄する波よ	返す波よ
寄する波も	貝の色	月の色も	星のかげも